

《教育長メッセージ 第 62 号》



『支援教育』

学校教育では、学習や集団生活を教員が子どもを教え導くということから「指導」という考え方が一般的です。

学校では、学習のねらいや生活のねらいを、教員の指導の積み重ねで達成し、子どもたちに生きる力を育むのです。

しかしながら、平成に入ってからでしょうか、学校教育では、「指導」という言葉だけでなく、「支援」という言葉が使われるようになりました。

教育における「指導」と「支援」の言葉の概念を、私は、明確に理解しているわけではありませんが、今は、「支援」という考え方が教育現場にずいぶん浸透してきているなあと感じているところです。

私的なことですが、「指導」と「支援」から私が受ける言葉のニュアンスは、

「指導」は、ねらいを達成するために教員が主導で教え込むというイメージがあり、ややもすると教員と子どもの位置関係が教員の方が上という誤解を受けるような心配があります。もちろん、学習者である子ども主体で計画的に教育活動を行うことが本来の指導なのですが、誤解されていると感じるところです。

「支援」は、子どもの自主性を教員が支えてねらいを達成するというイメージがあり、子ども主体が子ども任せと誤解され、ねらいが達成できないのではないかと懸念を抱かせる心配があります。本来は、ねらい達成のために、その子どもの実態に応じて計画的に教育活動を展開ということですが、うまく受け止められない面を感じるということです。

さて、ここで、学校教育において、どちらが効果的であるか比較することは適切ではありませんし、指導と支援の本来の在り方から言えば、どちらの視点も教育活動には欠くことのできない大切なことです。

ただ、私的な考えとしては、教員の姿勢として、これまで、教員は指導者であることから、指導という視点が大きかったのですが、私は、そこに、ひとりひとりの実態に応じた学習を進める必要があるということから、支援という姿勢をより大きく持ってほしいと思っています。

また、私は、「支援教育」は障がいのある子どもの特性に応じた教育ということで、障がい児教育という受け止め方をされているのが一般的ですが、私は、障がいのあるなしにかかわらず、すべての子どもには特性があり、その特性に応じた教育を展開する必要があると思っています。

私は、今、次の海老名の教育計画を策定するにあたって、海老名の子どもたち全員、ひとりひとりの特性、ひとりひとりのニーズに対応した教育をどのように展開すべきかと、考えているところです。

次回は、「巣箱」について、私の思い出を述べてみたいと思います。